

# 「イリアス」の統一ユニテイに関する一ノート

中 村 善 也

一

ホメロスと名付けられる詩人の存在と、彼が敘事詩「イリアス」及び「オデュッセア」の作者であるといふことは、古代全體に一貫して信じられていた所であつた。しかも、このホメロスは、これら二敘事詩のみならず、*erikos kúklos* と稱せられる敘事詩群及びその他のヘクサメーター詩の幾つかの作者であるとも考えられてゐた様である。

しかし、ヘロドトスが、その「歴史」第二卷一一七節に於いて、「キエプリア」(*erikos kúklos* の中の一つ)を、ホメロスの作ではないと断定してゐる様に、多くの作品を一人のホメロスに歸することの不合理さに氣付き、本當にホメロスの手に成つたものとさうでないものとを辨別しようとする努力があつたことは認められる。既にアリストテレスに至ると、「イリアス」、「オデュッセア」の他に、ホメロスに歸せられるべきものは、「マルギテース」のみとされて居り、アレクサンドリア時代に至つて、「イリアス」、「オデュッセア」のみをホメロスの眞作

「イリアス」の統一に関する一ノート

であるとする所に落ち着いたと思はれる。

尤も、このアレクサンドリア時代に於いて、「イリアス」と「オデュッセア」とが、夫々異つた作者に屬するものであると主張した、*Kollaire* と所ばれる一派の人々が見出されるけれども、スコットの云ふ所によると、彼等の説は、政治力と文化指導力を失つたギリシア人の、歪められた *sophistry* の所産であり、殆ど顧みられることもなく終つたのであつて、殆ど問題とするに足りないといふ云つていい。

① J. A. Scott: *The Unity of Homer*, p. 39

この様にしてヴォルフ (F. A. Wolf) の出現に至る迄、ホメロスは、二大敘事詩の實在の作者として、逆に言へば、二大敘事詩は、ホメロスといふ實在の詩人の手になつたものとして、信じられてゐたのであつた。

この様に、古代に於いて、若しホメロス及びホメロス詩に關して問題らしいものがあつたとすれば、それは、ホメロスの眞作の範圍を決定しようとする問題であつて、しかも、「イリアス」、「オデュッセア」の作者としてのホメロスは、既定の事實として疑はれることはなく、この

二作以外に、尙ホメロスに歸せられ得る様な作品の有無が、そこに問はれるべき問題であつた、と云ふことが出来る。

近代のホメロス問題とその批判は、周知の様にヴォルフの「Prolegomena ad Homerum」第一部(一七九五年)に初まるとされる。そして、ここでは、古代以來疑はれることのなかつた、この、「イリアス」「オデュッセア」の作者としてのホメロスが、思ひ切つて、疑問の渦中に投ぜられてゐるのである。所謂 Homeric unity, Homeric Einheit が、この二大叙事詩の中にあつてさへ、初めて大膽に、問題として問はれた所に、ヴォルフの持つ意味があると云へよう。彼の中のラディカルな面は、更に、ラッハマン(K. Lachmann)に於いて徹底化せられ、ホメロス詩は幾多の歌謡に分解され、統一的作者としてのホメロスは完全に否定されるに至つたのであつた。

しかしながら、同じく Wolfan と謂はれるヘルマン(G. Hermann)に於いて、既に、それら個々の歌謡の中に、一人の作者の本來の構想が可成りの重要性を認められてゐること、及び、續くニッチュ(G. V. Nitzsch)に於いては、未だ筆録せられてゐない群小歌謡の集合體としての原始的叙事詩の概念が捨てられて、それ等の段階から一步の前進を果した一人の作者ホメロスが考へられてゐることを、我々は見逃してはならない。つまり、ヘルマンは、ホメロス詩に於ける構想上の統一を認めようとしてゐるのであり、ニッチュは、同一作者によるその統一を考へてゐると云へる。

ホメロスに於ける統一の問題を形成するこの二つの統一が、この様に、ホメロス論争の、その初期の段階に於いて、早くも、主張され初め

てゐるといふ事實は、決して無意味なものではあり得ない。ヴォルフの宣言は、成程、爆弾的宣言ではあつた。しかし、その爆煙の消えやらぬ間に、ヘルマンとニッチュは、既に微かな程度にせよ、失はれた統一を回復しようとしてゐるのである。この意味に於いても、ヴォルフの持つ意義を、或る限界以上に過大評價してはならないであらう。彼自身、第一部の外的證據に對して、その内的證據を盛ることを約束した Prolegomena 第二部を世に問ふことを、遂に果さなかつたのである。

要するに、ヴォルフはフランス大革命を生んだあの時代の子であつたことは、否定出来ない。一人のホメロスの權威を認めるに堪えず、ホメロスの下に消し去られた、作者の「衆」を救はうとする意志が、彼を動かした原動力であつたかも知れない。しかし、彼の企てた「大革命」は、仔細に吟味すれば、ホメロス問題のその後の發展から考へて、その外見の華やかさ程の成果を、彼が本來意圖した意味に於いては果してゐないかの様である。ヴォルフの功績は、彼の言説にあるのではなくて、寧ろ、證據なき無批判の上に築かれてゐた信念に批判の余地を暗示し、ホメロス及びホメロス詩に對する學問的研究を促した、さういふ點に於いて認められなければならないのであらう。

そして、この様にヴォルフに初つたその後のホメロス批判の方向は、ラディカルな、ヴォルフ——ラッハマンの線に沿ふといふよりも、前述のヘルマンとニッチュの周圍を廻つて、むしろコンサーヴァティヴに動いて來たことも亦、事實であらう。殊に、後にクリスト(W. Christ)に至つて、この兩者が巧みに綜合されてゐることは、興味ある示唆を含むものであると云へるであらう。十九世紀末には、マイヤー(E. Meyer)、

ローテ(E. Rhode)等、一人の詩的天才を否定する Volkslied の立場より論じ、更に近くは、traditional book としてのホメロス詩を規定しようとするマレー(G. Murray)等の研究も出てはゐるが、二十世紀に入つて、ミルダグ(D. Milder)、ローテ(K. Rothe)、アマン(Th. W. Allen)、スコット(J. A. Scott)等、所謂 Unitarian、又はそれに近い學者の輩出を見てゐることは、これも見逃し難い事實である。

例へばスコットなど、それこそ完全なユニタリアンであつて、一人の詩人ホメロスの存在と、「イリアス」「オデュッセア」が彼の藝術的天才の所産であることを信じ、それ以外の要素を、二大敘事詩から悉く排除しようとしてゐる。アレクサンドリア時代頃の古代人の信念が、こゝで、完全に、いや、より以上の鞏固さを以つて、復活されてゐると云へる。ヴォルフ以來百三十年の長きにわたつたホメロス論争の、少くとも現在に於ける歸結の一つがこの様なものであるとするなら、ホメロス問題の論争は、結局、一つの空轉でしかなかつたかの様に考へられもするであらう。しかも、スコットが、

Saddest of all is the fact that, for about a century, Homeric criticism has lived apart from Homer. (op. cit. p. 104.)

と云つてゐる様に、議論の多くが、論者の側のひとりよがりの主観内至誤謬に依存してゐた點が少しでもあつたとすれば、そして、新説と名のつくものを歓迎するのに急であつたと云はれる、當時の學界の惡弊を思へば、尙更、我々をして考へさせる所がある。そして、前述の如き、今世紀に於ける反動的傾向の擡頭を思ふ時、ヴォルフ以來の一世紀有餘は、結局、長い迂回の道であつたかの様でもある。或ひは、ホメロス批

「イリアス」の統一に關する一ノート

判といふ様な性質の仕事そのものが、所詮不可能を追ふ空しい努力でしか有り得ないのかも知れない——

## 二

ホメロス批判の仕事の、この様な空しさを強調し、分析的批判の方法に反對する人々を、我々は、前世紀の八十年代の終り頃から、見出すことが出来るであらう。ブーゴア(A. Bougot)は、「イリアス」の、作者に於ける統一を主張し(一八八八年)、ローテは、詩中の反覆や矛盾が必ずしも異つた作者達を前提しないことを論じ(一八九一—九四年)、カウアー(P. Cauer)は、在來の Homerkritik の方法的缺陷を見事に書いてゐる(一八九五年)。

これ等の、ホメロス批判そのものへの批判は、しかし、在來のものに代はるべき新しい批判の基礎を我々に提示するものでないなら、我々にとつて直接の意義を持つものであるとは云ひ難い。單にそれらが破壊に次ぐ第二の破壊でしかないなら、我々の、ホメロス詩の受容の方法と態度とを、一層混亂に陥し入れるだけであるかも知れないのである。

こゝで、ヴォルフ以來の問題とその批判の流れと別に、古くより、ゲラーテ、シラー、ヴァイラント、フォス、ド・キンシイ、シェリー、アーノルド、ラング、ポーブ、近くは、A・シモンズ等の、詩人及至は詩的才能に恵まれた人達が、批判を抜きにした詩的享受の立場から、ホメロスに於ける統一と、統一ある作品としての兩敘事詩の藝術的卓越性を信じて來たことを思ひ起すのも悪くはあるまい。

彼等にとつては、ホメロスが、何時、何處で、生れたにしろ、「イリ

「オデッセア」が、どの様な過程を経て現形に達したにしろ、その様なことはすべて問題とはされない。現形のこの二大叙事詩の、文學作品としての印象と効果とが、彼等にとつてすべてなのである。彼等は、古代人と違つて、ホメロス詩の聴衆ではなくて「讀者」であり、その享受の態度、方法に於いては、近代の文學作品に對するのと殆ど變る所はないであらう。古典作者に對するその様な態度そのものは暫く措くとして、ここで我々の注意を惹くのは、三千年の間隔を飛び越えて、この古典作品が、批判的取扱ひ以前に、純粹に藝術的視點からする享受と評價に堪へ得るといふ事實である。堪へ得るといふだけではない、藝術作品としての比較を絶した卓越性が認められてゐるといはなければならぬ。そして、このやうな卓越性の裏には、一つの作品としてのその統一性と、その統一ある全體を構想した一人の天才的詩人ホメロスの存在は、當然のこととして要求されることになる。彼等にとつては、ホメロスの名の下に傳はる二つの叙事詩は、何等かの問題以前に、少くとも統一ある作品であり、ヴァイラモヴィッツにとつて、現形「イリアス」が ein tibles Flickwerk であつたのと、著るしい對照をなしてゐると云はねばならない。彼等にあつては、「イリアス」の、本來の、よりよき末尾を考へる必要はさらに無く、現形のままで十分だつたのである。

この様に、傑れた詩的素質と直觀に恵まれた人達が、ホメロス詩の現形に於いて、その全體に浸潤する藝術的統一を感得し得たといふことは、それが、現形のまま、統一ある藝術作品として讀み得られるといふ、少くとも可能性を示すものとして意味があらう。それは、何等かの

意味に於いて、或ひは Flickwerk であるかも知れないし、又、舊約聖書に比せられ得るやうな traditional book であつても構ふ所はない。少くとも、それが、現形のまま、我々の藝術的感覚と意識に抵觸しないだけの統一性は保持して居り、一つの全體的作品として感得出来るといふことにならう。そして、ゲーテ、シラー、ポープ等の詩人達の詩魂に觸れて共鳴するを得たやうな、ホメロス詩のこの詩的卓越性は、おのづから、そこに破綻のない藝術的統一を前提し、やはり同じく一人の詩人の詩魂に發するものであつて、その詩人の詩的意圖と構想に由來するものであらうこと、その起源はともかく、ホメロス詩は、少くともその完成の最終的段階に於いて、かかる一人の詩人の力を必要としたであらうこと、等が、そこから考へられてよいのかも知れないけれども、さういふ風に推論を進めて行くことをここで我々の問題と思ふのではない。たゞ、こゝでは、既に述べた様に、近代の詩的諸才能がそこに破綻のない詩的統一を感じ取つたことの中に、ホメロス詩が現形に於いて全體としての統一を失はぬ作品であり得ることの可能性を見出して、その様な意味に於いて考へられた「イリアス」の藝術的統一が由來するであらうと思はれる所の幾つかを、氣付くままに記して見ようとするだけである。

三

「イリアス」はトロイ戦争全體の経過を物語るものではない。トロイ攻城開始以來、既に十年に近い月日を闊した或る日のアガ멤ノンとアキレウスの争ひから、怒つたアキレウスの戰場退場によつて不利に陥つ

たギリシア軍を救ふべく彼の身代りに出陣したパトロクロスの死を憤つたアキレウスがヘクトルを討つてその仇を報ひる迄の、トロイ戦争中の僅か一部分に過ぎない。全體の日數にしても極めて僅かである。しかも、それが、アキレウスの怒りといふモチーフによつて蔽ひつくされてゐるのである。

この事は、先づ第一に、「イリアス」の統一を形成するものでなければならぬ。少くとも、怒りといふモチーフの上に全體を按配しようとした、(誰にしる)作者の、統一の意圖だけは觀取されてよいであらう。或る人達が説くやうに、幾多の先在詩篇の編輯、又は、Volkslied 的なものからの徐々なる發展が、「イリアス」を生んだものであるとしても、一つのモチーフの下に全體を従はしめようとする意圖がなければ、現形の「イリアス」は生れはしなかつたであらう。近代の文學作品の中にさへ、この様に一つのモチーフによつて見事に首尾を貫かれた大作品を見出すことは難しいかも知れないのである。當り前と云へば當り前のことであらうけれども、「イリアス」の全體の統一感は、やはり、この緊密に織られた主題の線から由來することは本當であらう。

しかし、「アキレウスの怒り」といふモチーフに就いて、相反する二つの解釋が存在することを、序でながら一寸指摘しておかう。第一の解釋の手近な例として、J. A. シモンズ<sup>①</sup>を擧げることが出来る。彼は、「イリアス」といふ作品はアキレウスの怒り、及び、それに表はされたアキレウスの性格を表現しようとするものである、と素朴に正面から主張してゐる。アガメムノンの傲慢を憤るアキレウスの怒り、それが解けた後には、それに代はる、パトロクロスの死を憤る、ヘクトルへの怒り

——同時にそれはパトロクロスへの愛でもある——、その様な怒りと愛情の交錯の中にアキレウスといふ一つの個性が如實に表現されて居るのであつて、中世の騎士道にも比すべき、素朴で純情なギリシア的武人の生ける典型を描くことこそ、「イリアス」の作者の意圖した所である、といふわけである。

① J. A. Symonds: Studies of the Greek poets.

シモンズのこの考へは、それこそ、素朴そのものであつて、「イリアス」の持つ歴史性や、敘事詩といふ文學形式の特殊性等をすべて問題にしようとはしない。ひたすらに、一つの藝術作品を味はうといふ態度である。それは、この様な態度自體の問題はともかくとして、彼をしてこの様にすべての制約性を問題にせしめない程の、アキレウスの性格といふものに示された「イリアス」の藝術としての主題の統一性を思はせるには十分であらう。

第二の解釋の例として、ミユルダー<sup>②</sup>を引かう。彼によると、「イリアス」は、獨立した、多くの、部分としての挿話(例へば、初めの方から選べば、クリュセイスの送還、テルシテスの場面、グラウコスとディオメーデースの會ひ、等の)から成り立つものであり、これらの幾多の獨立せる部分を有機的に繋ぐ糸として、アキレウスの怒り及び *Boule* ④、それから導かれる *Götterszene* 等が案出されたのである、といふ。ローテも、アキレウスの怒りを、この様な、純粹にテクニク上の手段であつて、描かんとした對象そのものではないと云つてゐるし、スコットもその様に考へてゐる様である。

② D. Mülder: Ilias (Parly-Wissowa, Realencycl.)

ミュルダールの云ふ、Götterszeneに就いては、後にも取り上げるであらうけれども、要するに、彼等ミュルダール、ローテ等は、アキレウスの怒り"は、「イリアス」に統一をもたらしべき結びの糸であつて、これによつて全體の統一が生れるのではあるけれど、作者の描かんとした對象そのものではない、といふのであつて、シモンズの考へとは、正に兩極に立つのである。そして、シモンズが、描寫の當の對象としてのアキレウスの性格の表現の卓越性に、作者の詩的才能を認めたと對して、ミュルダール等は、この結びの糸としての「怒り"の案出の巧妙さに、作者の藝術的才腕を窺はうとするわけである。些細なことではある

かも知れないけれども、同じく、「イリアス」に於ける統一的要素として「怒り"を考へ、作者の非凡な藝術的天才を讃へながら、このやうな解釋の相違が生れてゐることは、多少示唆する所がないでもないであらう。ミュルダール、ローテ等が後の見解をとるに至つたのは、素朴な鑑賞者であるシモンズとは違つて、「イリアス」の組材の中に、矛盾さへする異質の諸要素を認めてゐた故であつたらうと考へられるが、殊にキルヒホフの徒として出發したローテにあつては、到底、シモンズの如く單純な意味での統一を考へることは出来なかつたのであらう。分析的ホメロス批判がこの様な意味に於いて、生かされてゐることは、ローテに於ける結論の如何は別として——彼の所論は“Dichtermithologie”と呼ばれる程獨斷に走つた所があるといふ——、將來に於けるホメロス問題の一つの在り方を暗示するものであるかも知れない。元來、ホメロス詩といふものは、近代及び現代人にとつての様に、通讀されたものでなくて朗誦されたものであつたと考へられる以上、部分の重要性といふもの

が一應、尊重されるべき要素であつたことが察せられるからである。——しかし、ここで、それ等の點に深入りすることは、既に斷つた様に、差し當つて我々の問題とする所ではないのである。

以上は、「イリアス」に於ける、モチーフによる統一であるが、次には、登場各人物の性格に於ける統一といふものが考へられよう。スコットも云ふ様に、「イリアス」の組材乃至筋の細部に於いては、幾つかの矛盾が見出され得るとしても、人物の性格の表現に於いては、かかる矛盾は意識に上る程のものはなく、この様な意味での藝術的統一が保たれてゐるのである。

素朴、純情、一徹な武夫としてのアキレウス、思慮に富み、時には老獪でさへあるオデュッセウス、王者的タイプの一つの典型であるアガメムノン、若さと精悍さに溢れるディオメデース、剛勇だが、武骨一點張りのアイアス、賢明にし滋味のある老ネストール、良き武人、良き夫、良き父、良き義兄であるヘクトール、特殊に苦しい立場に立つヘレネー、貞淑で優しいが、どこかしつかりした、良き妻アンドロマケー等、其の他すべて、近代小説の小器用さが遙かに及ばぬ、諸性格の統一ある見事な描き分けが見られる。部分的な細部の矛盾を越えて、これらの性格的統一が、「イリアス」の藝術としての統一感をもし出してゐることは疑ひのない所であつて、殊に近代人には、この様な要素の持つ効果は少くないと考へなければならぬであらう。

更に、物語りの順序を意識した、一人の作者の、統一的意圖に由來すると考へられさへする様な、その手法による統一が見られるであらう。例へて云へば、登場人物に關する説明的描寫が反覆されてゐないこと

なども、その一つであらう。最初の登場に際して説明された事柄は、次回以下に於いては適宜に省略されてゐるし、又、最初の登場が偶然的な、あまり意味のない登場である場合には、詳しい説明は、後の、より重要な登場の際に譲られてゐる。具體的には、例へばネストールは、その最初の登場に於いては、(A. 247行以下)

.....τοῖσι δὲ Νέστορι  
ἦδυστήν· αὐθόρουσι, ἰσχυρῶν Πυλίκῳ ἀπορητήν,  
τοῦ καὶ ὑπὸ γλώσσην μέλιτος γλυκίῳ βίβου αὐθόγ.

以下、すべて六行にわたつて説明されてゐるけれども、それ以後の個所では、再びこの様な説明を受けることはない。又、ブリセイスは、單に話柄に上つたり、沈黙の登場にしか過ぎぬ場合(A. 184, T. 255など)には、説明といふべき程のものは見出されず、パトロクロスの死を悼む條(T. 282以下)に至つて初めて、

.....ἰκελὴ χυρᾶσῃ ἄφροδύτην  
.....χερσὶ δ' ἴμοσεν  
.....καὶ ἀπαλῆν δειρῆν ἰδὲ κακὰ πρόσσωπα

等の容姿の描寫が見られ、續いて、彼女自身の言葉によつて、その境遇の説明がなされてゐる。この様な手法は、一つの統一ある連續を持つた物語的敘述に必然の手順といふべきものであつて、却つて無意識のうちに見過されがちなものであるけれども、その逆の場合には、必ず、甚だしい不統一な連續として浮び上るに相違ないであらう。

同様に、又、敘述を延引して、サスペンスの感を強める手法が見出さ

「イリアス」の統一に關する一ノート

れよう。全體の經過の運びそのものが、緊急の場面の巧みな迅速さを除いては、徐々に大詰へ向ふ緩やかなテンポを示してゐる。アリストテレスが、「イリアス」を、敘事詩として幾分長きに過ぎと考へてゐたことも、緩やかなテンポから結果された、その全體の長さに由るのであらうと考へられる。しかし、アリトテレスは、悲劇と敘事詩との相違を、單に、コンポジシヨンの μέλιτος と μέλιτος といふ、外面的な、結果的なものに考へ過ぎてゐるきらひがなくもない。①敘事詩の μέλιτος を生む敘述の手法が、ドラマに於ける詩的表現の方法と質を異にするものであることを忘れてはならないであらう。ゼウスとテティスとの約束によつて、ギリシア軍が悲境に陥り、パトロクロスの出陣を見るに至ることは既に既定の事實なのであるけれども、それが仲々に遷延されて、一見變化のない戰鬥の場面が續いて行く。「イリアス」に於ける部分的エピソードや、英雄達の *diarctia* が、古代人にとつて遙かに關心する所であつたといふこともあつたらうけれども、少くとも、我々にとつては、この様な手法は、例へば長編小説(ラヂオの連續物語や連續講談でもいい)に見られる様な、長い物語を飽かせぬ様にするサスペンセンス感をもたらし、その様な意味での一技巧として働く所が多いであらう。現代の長編小説を讀むに似た態度が我々が「イリアス」を通讀出来ることは、古代人から考へて見れば随分奇妙なことであるかも知れないけれども、事實、我々にとつては、もはや、そのやうな讀み方しか出来なくなつてゐるのであると云はねばならないであらう。

① Arist. Poet. XXIV, 2

この、サスペンスの手法は、クライマックスの場面を導く際に、特に

顯著に現はれてゐる様である。パトロクロスの死を憤つたアキレウスが仇敵ヘクトルに會する前に、十八、十九、二十、二十一巻といふ多くが費され、ヘクトルの死を敘する條は、遂に來るべきものが來た、とでもいふやうな、意外に平靜な筆致で敘し去られてゐる。敘事詩が周知の傳説を内容とする以上、*was* よりも *wie* の表現に重きが置かれるものであるなら、この様な *wie* の表現に於いて、延引によるサスペンスの手法が用ひられるのは當然のことであらう。そして、この、敘述の延引をもたらず爲に、*Götterszene* の持つ意味があると考へることも出來よう。アイアス、メネラオス、パリスは、決して死んでしまつてはならないし、ヘクトルはアキレウスに會する迄に、他人の手にかかつて死んでほならない。彼等が、危急に際して負傷さへしながらも死を免れるには、神々のはかりごとが必要である。「イリアス」の神々も、それ等英雄達に死を免れしめ、又は、事件を早急に落着せしめずに遷延させんが爲の一種の、デウス・エクソ・マキナであるとも云へるであらう。個々の挿話や、*Einzelkampf* の場合も、事のスムーズな進展に對する阻害と見えながら、實は、却つて、來るべき大詰へと向ふ適當なサスペンス感をもたらずものであつて、あの、悲劇に通ずる所さへある何か悲愴な調子を盛り上げるのに役立つてゐるのかも知れないのである。

以上の他にも、「イリアス」の全體としての一貫性を印象づけられるやうな手法は多いと思はれるが、簡単に氣づいたものを擧げて見たまでである。

最後に、「イリアス」全體に一貫して流れる氣分と雰圍氣があるであらう。それは、素朴な時代の持つ、何か若々しい清朗さと單純さである。

シモンズが云ふ、永遠に青年としてのアキレウスの性格も、その様な新鮮な世界の體現であるし、アーノルドによる、*plain in thought; plain in diction; and noble* といふ言葉も、ホメロスの世界の、一貫したその様な特質の一表現とも見られよう。

この様な一貫した世界の印象は、それが現代とは異つたプリミティブな世界である故に、一層、我々には、我々の世界と隔絶した一つの完結した世界として寫るのかも知れない。従つて、このことは、眞の意味の *Homeric unity* といふべきものにとつては、欺瞞的な、危険な印象であることにもなるであらう。しかし、既に繰り返した様に、こゝで、我々はさういふ點を論ずることを意圖するものではない。たゞ、我々にとつては、その一貫したスタイルと世界とが、一つの統一的な姿を示現するものであると、いふだけにとどめたい。

以上、とりとめもなく擧げて見た様な諸點に、現代の我々が「イリアス」を古典作品といふ制限を忘却した一つの詩的藝術作品として讀み得るといふ、そして、その際、必ずしも矛盾と不統一に災されないといふ根據の幾分があるかも知れない。これ等のことは、しかし、今更らしく擧げて見れば、たゞこれだけの、恐らく、何の變哲もないと思はれるに違ひないものであらう。大切なのは、個々のさういふ點ではなくて、やはり、それらの持つ質の問題なのであつて、歸する所は、さういふ個々のものの中に示されてゐる藝術的卓越性といふことになるのであらうか。現代に於いて考へ得られる「イリアス」の價值の一つが、この様な、藝術的な意味のそれであることは、否定出來ない所であらうし。



尙この他にも、この様な意味に於ける、「イリアス」の藝術的統一に  
貢献してゐると考へられる要素は多いであらうが、以上、簡単に、厳正  
なホメロス批判の問題とは一應別に、現形に於ける「イリアス」が、そ

のままの全體に於いて、我々にとつて一つの統一體であると考へ得られ  
る可能性を思つて見たに過ぎない。その様な制限内に於いての、極めて  
貧しい一考察にとどまることを、最後に再び斷つて置かねばならない。

——以上——